

教室と社会の接点としての演劇上演会

中山由佳（早稲田大学）

発表者は、2005年より大学の日本語・日本事情関連の授業の枠の中で、舞台演劇制作を行う授業実践を行っている。今までに制作した作品のほとんどは、学習者が話し合いでテーマ設定を行い、台本を執筆し、練習を重ねて上演するというプロセスをたどっている。上演にあたっては、200人程度の人数を収容できる大講堂を確保し、関係者以外の「一般」の観客を意識した作品作りを行っている。

テーマ設定では、「演劇作品を通してどのようなメッセージを観客に伝えたいか」という観点で学習者が提案をし、議論を重ねて決定する。制作の過程において、話がそれてしまったときに、立ち戻ることができる軸となるのもこのメッセージである。大人数で共同執筆を行っている本授業においては、作品をまとめていくうえで「メッセージ」は大切な役割を果たす。

ある学期で制作した作品のテーマは、「自分は自分」で、両親が異なる文化背景を持つ主人公が、ある特定の文化圏の中で居場所が見つけられず葛藤するが、最終的には自己の内包する複数性を認めるという話であった。その学期における学習者の背景は、外国人留学生、帰国生、複数の文化背景を持つ学生、とさまざまであり、個々が共感を持って取り組めるものであったと思われる。では、観客にとっては、作品は、そしてメッセージはどう伝わるのであろうか。上演会では観客にアンケートに回答してもらっているが、回収率も高く、「伝わった」「感動した」というものが多い。演劇上演会という場は、学習者にとって、取り巻く社会とつながることのできる場として機能しうるのだろうか？本発表では、上演作品（40分）をテーマ設定のプロセスを分析・考察を加えつつ視聴し、フロアの皆さんとともにその可能性について探ってみたい。